

日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

われわれの手で名古屋ボストン美術館を支えよう！

Let us support the Nagoya/Boston Museum of Fine Arts!

顧問 藤崎 博也

7月16日の朝日新聞東京版の夕刊で、「名古屋ボストン美術館、財政難で09年閉館」の記事に驚いたのは、私だけでなかったと思います。

同館は世界でも屈指の東洋美術のコレクションを持つボストン美術館の姉妹館として、1999年に開館してからまだ5年目ですが、毎年2回の企画展を催しており、本会でも有志のグループがこれまで3回の鑑賞旅行を行っています。

私は日本とボストンの間の重要な絆の一つともいえるボストン美術館の歴史を顧みて、「何とかしなければ」という強い思いに駆られ、その翌日に行われた『ボストン・ポップスの夕べ』で、一部の方々にお話ししましたところ、会報を通じて皆様へ訴えるように仰せつかりました。

何分にも新聞記事だけでは情報不足なので、その後同館を訪れて広報部の方から詳しい事情を聞き、さらに後日、現館長の山口静一先生からもお話を伺いました。かいつまんでいえば、この件はマスコミが誇張したこと、2009年に閉館を決めたわけがなく、その後も継続するように努力していること、そのために解決すべき問題は多いが、外部の方々の協力をお願いしたいのは、歴史的にも内容的にもユ

ニークな名古屋ボストン美術館の存在を広く周知させ、年間の入場者数を開館当初なみに増やすことであり、それによって同館の存在感が高められ、一般社会・財界の理解・支持も得やすくなる、ということです。

ちなみに、開館した年の入場者は70万人でしたが、その後は30万人前後に留まっているようです。

そこで私が考えましたのは、この美術館から、本会をはじめボストン美術館に親近感を抱いている会員の多い団体に対して、その存在をアピールし、企画展などに関する情報をこまめに送ってもらうことでした。皆様から、ご交友関係を通じてお力添えいただければさらに効果的です。

なお同館のホーム・ページに申し込みは無料で毎月新しい情報をメールで送ってくれます。また、別項でご紹介がありますが、現在の企画展のテーマは『ボストンに愛された印象派』で、多数の名画が系統的に展示され、中にはこれまで鑑賞の機会が少なかった隠れた名画もあります。期間は11月9日までですが、機会を作り、ぜひ鑑賞されるようにお勧めします。問合せ先 ☎ 052-684-0101
ホーム・ページ <http://www.nagoya-boston.or.jp>

総会・懇親会のお知らせ (同封ちらし参照)

日時：平成15年11月14日(金)午後6時開場、午後6時半開会。

場所：NEC三田ハウス芝クラブ(JR田町駅、都営地下鉄三田駅下車)

港区芝5-21-7、☎03-5443-1400

出席者：当日払い お一人 6000円/同伴者 5000円

事前送金 お一人 5000円/同伴者 5000円

送金方法：

申込み先：日本ボストン会事務局(同封葉書、又はE-mailにて10月31日まで
にお知らせ下さい E-mail:

日本ボストン会の活動はホームページをご覧ください。<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~boston/>

お花見の会

2003年千鳥が淵の桜に思う

水野賀弥乃

花冷えというよりも、花凍りとても称したくなる冷たい雨の中をピンク色の傘を差して、友人と千鳥ヶ淵へ向かった。4月5日、日曜日。既に足首は冷え切り、冷気が足元から上がってくる。まだ明るさの残る午後5時半に、藤盛様御夫妻の笑顔に出会って、やっと温かい気持ちになれた。早速冷酒を取り出して身体を内から暖める。ちびりちびりと二杯目を頂く頃には、日本ボストン会のお懐かしい皆様のお顔が揃い、あちらこちらで笑顔と談笑の華がこぼれる。昨年来楽しみにしていた桜の花弁を冷酒に浮かせて杯を干す。(そのためにカップ式の冷酒を持参。)ほんのり花の香りが漂って私のささやかな願いは叶い、少し元気になった。桜の精の力だろうか。

しかし、今年は心から晴れやかな気持ちでさくらを眺めることが出来なかったことに悲しみを覚える。桜は今年も美しく華やかに日本の安らかなりしことを寿いで、また地に還っていく。だが同じこの地上で、意思的に殺戮と破壊が行われている事実を、死に直面している人々がいる事実を知る生身の人間として、心が塞ぐ。冷たい雨は、彼等の恐れと悲しみ、痛みの万分の一を、遠い日本の私に与えてくれているのか。

日本は原爆投下を経験して、「戦争」という人間の過ちを二度と繰り返さないと犠牲者に誓い、銘記している。私の両親は最初の子供を広島原爆で亡くしている。姉は4歳だった。祖父はたまたま疎開先の宮島の別荘から広島市内の本宅に姉連れ帰っていた。昭和20年8月6日の朝、姉がぐっすり眠っていた為、祖父はひとり宮島に戻ったがその後、原爆が投下された。爆風により、家は倒壊し、母と姉はその下敷きになった。地下室にいた父は火の廻り始めた家の天窓から、母を助け出すことが出来た。「お父ちゃま、たすけて〜。」という姉の声が幾度も聞こえたという。しかし、火の廻りの方が早く、父は姉を救うことができなかった。この話を母から聞いたのは、つい数年前のことである。姉の死から半世紀もの間言葉に紡ぐ事が出来なかった生々しい父と母の心情を、初めて知った。残酷な娘の死であったが、母はこう付け加えた。「若い女中さんも亡くなったの。他所様のお嬢さんをお預かりしていて、自分の娘だけが助かっていたら、申し訳が立たなかった。死んでくれて良かったのよ。」と。私の生まれる11年前

の事である。その間に姉3人と兄1人(生後6ヶ月で病死)が生まれている。子供の一人一人が元気に成長することが両親の喜びだったに違いない。そんな両親の思いを知ることもなく、我々娘達は生まれ、既に姥桜に成長してしまった。

戦争は多くの人生に踏み込み生々しい傷を残す。戦争は、人間の中の悪を曝け出す。どんな善人も悪人も戦争を機に、己が内に棲む悪が顔を剥き出し、怒りと憎悪が残忍な行為となって暴れ他者を破壊する。この醜い戦争は、しかし遠い過去や他国の出来事であろうか。否、戦争が噴出させる人間の悪の火種は今此処に私自身の中にもある。私達の多くはたまたま幸いにして、人を傷つけず今日を生きている。だが、いつ、不本意に他者を傷つけ、また傷つけられるかもしれない。むしろ他者の心に一生消えない傷を負わせて知らぬ顔で生きているやもしれぬ。その時、戦争は最早外的なものではなく、個に内在するものとなる。自己の内の悪が般若となってその恐ろしい顔を曝け出す時、人はいかにしてこの般若に打ち勝つ強さを育てられようか。戦争は癒しがたい傷を両親に齎したが、父も母もそれぞれの長く苦しい内なる戦争に打ち勝って来た。己の般若に勝利し叡智に換え得た者は、決して地上の戦争を繰り返してはしない。本当の意味で戦争に打ち勝つとは、己を征した次元で語られるものなのではないだろうか。

戦没者墓苑である千鳥ヶ淵の桜の中で思う。武力に奢り、慢心の故に悲劇的敗戦国となった時代を乗り越えてきたはずの日本で、先哲の智慧を布石の縁として、謙虚にしかし気高く前進し、心を培い、絶対なる善への信念において交流できる時代を築いてゆくことを、今を生きる私達が意思として心得ること、それが戦没者への、また迷いつつ転びつつも歴史を生きた祖先たちへの真の慰霊なのではないだろうか。そして、何もわからず亡くなった姉のような犠牲者たちが叶えられなかった「生」を生きている私達が、同じ地球に生きる人々に、人間の精神史を後退させることを決して許さず、共に成長してゆくことを、日本人として建言してゆくこと。この意思に貫かれて初めて人々は互いの相違の中に「自由」であることの喜びを見出し、享受出来るのではないだろうか。

足は相変わらず冷え切っている。愛猫はそれでもかまわず寄り添って寝ている。冷たい一日だった。

後記：近隣の山種美術館では、桜の絵画の展示会、また飛鳥建設では、展望フロアを一般に解放して下さいます。来年のお花見時のご参考にさせて頂きませ。

クルーズの会だより

久米生光

この度、皆様の格別のご理解とご高配により日本ボストン会にクルーズの会を発足させていただくことになりました。

クルーズをこよなく愛する者にとってうれしい極みです。今後折りにふれ世界のクルーズ最新情報、客船の今昔、乗船レポートなどを交換し、一人でも多くの会員の皆様と共に楽しみの輪を広げられたらと願っています。

この頃食物について、ファーストフードとスローフードなる言葉がよく取り上げられます。旅行に関しても同じ感覚を持つ人が増えているようです。短期間の内に多くの観光地を効率よく見て回る、例えば全8日間でヨーロッパ3ヶ国訪問もパッケージは日本人にとって珍しくないとのこと。でもこれって欧米人には信じられない早業です。彼ら1ヶ国にその3倍の日数を掛けゆっくり過ごす、それも半分の費用で。

交通手段としての客船は完全に航空機にその立場を奪われて姿を消すと思われていた。何しろ船で1日かかる所をたった1時間で飛ぶことができるのだから。経営的にも比較にならない。400人のお客を運ぶのに、大型客船なら300名近い乗務員を必要とするのに、航空機ならその10分の1以下だ。

これを全く逆の発想で捕らえた新たな客船事業が始まった。1970年頃である。旧型客船を改装して輸送の器でなく浮かぶ(動く)レジャー基地に変えていった。勇気ある某ノルウエーの船主は、船旅そのものを楽しむ為の「クルーズ専用船」をいち早く建造した。2万~3万トン弱、乗客定員300~500人、米国人相手でカリブ島巡りを主航路として、時に世界一周で日本の港も訪れていた。

以来30年余が経った今日の客船ブームを誰が想像しえただろうか。世界のクルーズ客船のフリートは700万トンを超え、来年には史上最大の15万トンのクルーズ船がお目見えする。

船旅の魅力は、短い言葉ではとても表せない。あえて愚を恐れずに言えば、未知への遭遇、自然とのふれあい、新しい友との出会いである。

グルメ、ファッション、ショー、映画、文化講座、エステそしてカジノとあらゆる余暇の楽しみを満載した「動くリゾートエリア」が今日の客船の姿である。チャンスがあれば、まず、客船の来航時に会員と共に船内見学の機会を作りたいと考えている。

ハイキングの会

鎌倉散策

土居嘉子

6月8日(日)午前10時半、総勢13人が鎌倉駅に集合しました。バスを雪の下地区「岐れ道」で降り、「田楽辻子(でんがくずし)の道」を報国寺へ向かって歩き始めました。

「辻子の道」というのは、鎌倉時代に呼ばれていた小路上で、路沿いに田楽師が住んでいたためにこう呼ばれていると伝えられています。

鎌倉駅では多くのハイキング客を見かけましたが、この道にはほとんど人影もなく、鎌倉の小路をアジサイ見ながら楽しめました。



「イワタバコ」

そしてお目当てのイワタバコを小川沿いの石垣に見つけました。薄紫の小さな花とタバコに似た艶のある葉を持った清楚な花です。

竹の庭で有名な報国寺、さらに進むと古い洋館の旧華頂宮邸、ちょっと戻り、「巡礼古道」という頼朝が愛人宅へ通った道と言われる山道を10分ほど登り、子ども自然ふれあいの森の広場で昼食休憩、この後、住宅街の鎌倉ハイランド地区に出ました。

桜並木の住宅街を歩きながら明石橋、銀杯草の咲く明王院、終点は浄妙寺で「ティータイム」。お寺の中とは思えない洒落た石窯ガーデンテラスでピザや焼きたてパンを味わいました。午後3時現地解散。

「花とハイキング」は私の大好きな遊びです。お勧めのコースがあれば是非ご紹介下さい。



「旧華頂宮邸」の庭

美術の会

名古屋ボストン美術館の旅

山崎規矩子

5月に台風が本土上陸するのは38年振りという台風第4号のニュースを聞きながら、5月31日正午過ぎ、名古屋ボストン美術館に到着。

自他共に認める雨男S氏欠席の所為か、久米生光禰宜(牛毛神社)が宣はった日本ボストン会々員の熱意の所為か、台風の姿はなく、ボストンから参加の吉野耕一先生ご夫妻、関西から3名と東京からの参加者の合計21名、無事入館。

石堂勉事務局長のご挨拶に続き、井口特別展担当学芸員から公開されている「ボストンに愛された印象派」(Impressionism in Boston)についてスライドを使っての解説があった。

ボストン美術館を初めて訪れた時“どうしてこんなに沢山のJeans F. Millet やClaude Monetがあるのか”という驚きと疑問がこのレクチャーで解明された。1850年代にボストン出身の画家William Morris Hunt がMilletに魅了され、弟子入りまでしてボストンの美術コレクターにMilletの作品を奨めた。80年以降には、Monet のアトリエ周辺にボストン出身の画家が集い、Monet の展覧会が相次いでボストンで開かれ“レッドソックスを見るか、モネを見るか”というのが、当時のやり言葉になる程ポストニアンを熱狂させた。この結果、今日では本国フランスが羨む程の作品がボストンにある。

このレクチャーの後は、同時開催の「根付」の説明があった。ボストン美術館の1200点に上がる膨大なコレクションの中かあ96点が初公開。「根付」はポケットのない着物が主流の時代に印籠や巾着、煙草入れ等につけたアクセサリだ。鏡を使って裏側や下側も大きくスライドに写され、思わず笑ってしまう物から気味の悪い物まで、題材も架空の生き物から動植物と多岐に亘り楽しめた。

展示室で懐かしの印象派の作品と再会、こじんまりとした雰囲気の中でゆったりと堪能するまで鑑賞後、今晚のお宿の東京第一ホテル錦へ入る。

各自部屋で一息つく間もなく、4時にロビーに集合。イザ名古屋探検へ出発。隊長は名古屋を知り尽くしている男の内藤克己部長殿(清水建設)。歩きながら名古屋自慢から始まる。有名な100メートル道路、日本一の地下街(これは意外)、東京タワーより4年も早く日本初の民放テレビ塔、業界日本



〔睡蓮〕 クロード・モネ (ボストン美術館)



名古屋ボストン美術館前にて



オアシス21屋上階より眺めた名古屋テレビ塔
(空中に浮かぶガラスの大屋根に水が流れ、
外周の園路を若者が空中散歩する広場)

(名古屋ボストン美術館の旅、続き)

一の200社以上の会社数。一寸トーンが落ちて日本で3番目に緑の多い都市等、この目抜き通りの3大ホテルは当社の物件と、郷土愛と愛社精神に満ちた輝く横顔を見ながらオアシス21に到着。名古屋の新ランドマークは空中に浮かぶガラスの大屋根の水の宇宙船、ぐるっと巡って、閉館間近のノリタケの店へ滑り込み、台風一過の如く去った。

夕食は名古屋国際ホテル。料理も雰囲気も素晴らしかったが、その後の久米氏企画のミニコンサートが圧巻。内藤部長がご自慢の一つにつけ加えるのを忘れたかと思わせる美人5人のグループ。

ファゴットとピアノの独奏・協奏に加え、久米氏令嬢を含む3人のコーラスが続き、その美声とハーモニーに我がボストン会歌う会もタジタジの想い。

“モーツァルトの百面相”を耳に至福の気分でホテルに帰り、阪神タイガースが勝って(ヤッ!!)最高の一日となった。

翌朝、参加者12名で明治村へ。飯田喜四郎館長のお出迎えを受け“こんな大先生に”と藤盛紀明氏が恐縮。文明開花のロマン溢れる67棟の内、館長自らご案内下さった(予定外の行動とか)東松家、呉服座、西園寺邸、帝国ホテルが印象深かった。

東松家は油商から金融業と成功した豪商の家で、次々と建て増し4階建てという当時としては珍しい形で残す。茶室を2階に作った為、そこへ通じる部屋の真ん中に長板を敷いて敷石のイメージとし、茶室に座ると客人がそこを渡って茶室へ導かれる風情が粋な造りだ。水屋の水も階下の台所から井戸の要領で汲み上げる。雇い人が若い女性の場合は部屋を高い所に設け、寝る時には梯子を上げて身を守るとか雇い主の愛情が感じられた。

呉服座では奈落やセリ、楽屋を見学、西園寺邸では洋館から庭に出ると海を眺望する立地条件に加え、歩けばキィキィなる板の廊下や浴室、女中部屋からの脱出口等、外部からの侵入者に対する警戒を怠らない造りに納得。

帝国ホテルは日本古来の建物にアイデアを取り、大谷石をふんだんに使った建物、2階に1905年にポーツマス条約が調印された時に使われたテーブルが置かれ、ボストンとの接点を見た思いだった。

村内にはSLや京都市電、馬車、レトロなバスが走り、館長さんの説明後は、それぞれの体力と気力に合わせての自由行動。アイスクリームに大満足で一服する人や、市電に乗って燈台まで行った人など... 私達ボストン会が誇る健脚カップルは皆様のご期待に沿うべく、村内を隈なく廻り、帰りはぐったりの車中の人となった。



愛知芸術文化センター屋上より眺めた水の宇宙船の屋上広場



ハミング・バース
プラス2



明治村内・帝国ホテル正面玄関前にて

美術愛好会

鈴木春信一古を想う人(1725?-1770)
(# 2 1より続く)

酒井典子

心安らかな日常の景を描いた作品「三十六歌仙 坂上是則」は冬の訪れを詠んだ歌人の歌を絵にしている(1767~1768頃)。女性同士のおしゃべりが聞こえてくる様である。紙を切り取った部分から女性の顔がみられる。思わずみる人の笑みを誘う構図である。画面づくりの効果によって人と物がともに喜び、うたい合っている様だ。

さりげなく置かれた障子紙、丸盆、煙草盆、煙管、いづれも豊かな味わいのうちに確かな実在感に溢れている。鮮やかに色づいた葛のからまる垣、冬の訪れも間近なのであろう。胸に泌み入る風が吹き、匂いさえ漂い、時代の色気を感じさせる。

日本人の季節感を表した持統天皇の和歌「春過ぎて夏きにけらし白たへの衣ほすてふあまのかく山」を、春信は庶民のさりげない日常の風景として描いている(1767~1768頃)。

母親がたらいで洗濯をしている側で、腹掛けをした裸足の男の子が話しかける。姉が干している、飾り気のない風景の中に、いにしへの歌人の心が春信によって生き生きと表現されている。穏やかな空気、透明な光を浴びる母子の日常風景、いつまでみても飽きない、一瞬のさりげない光景が生きるものの絆を鮮やかに浮かび上がらせている。

毎年夏休みはMontreal郊外、セントローレンス川と合流する美しい運河のある街Lachineで過ごすことが楽しみの一つとなった。そこから車で1時間ばかり行くと、緑濃い山々と湖のあるLaurentian地方、湖に面して立つゲストハウスで数泊する。まるで時が驚くほどゆっくり流れる。湖の向こうに赤い夕日がまわりをも染めながら沈む。やがて湖は暗闇の中、見上げると光輝く星の数々、耳を澄まさないとなんか聞こえない様な、かすかな水の音がどこからとなく聞こえてくる。



三十六歌仙 坂上是則
(シカゴ美術館所蔵)



百人一首 持統天皇
(ボストン美術館所蔵)

新造船クリスタル・セレンティー 試乗会
04年2月5日(木)~14日(金)
乗船地 グアム、下船地 横浜(op 名古屋可能)
問合せ 久米生光

事務局よりお願い

日本ボストン会はメンバーリストを作っています。会員の方は是非、E-Mailアドレスを事務局までお知らせ下さい。イベントのご案内など、すぐにお知らせできます。

音楽の会

ボストン・ポップス
交歓ミニ・コンサート

関直彦

お馴染みのボストン・ポップス・エスプラナード・オーケストラが来日、8人の有志のご好意によるコンサートを昨年に引き続き開催することができました。7月17日、再びNEC芝俱樂部(三田ハウス)に総勢78名もの会員・家族・ゲストが集い、素晴らしい演奏と、その後の交歓会で盛り上がりを見せ、ボストンとの精神的距離を更に縮めたようです。

今年の演奏は弦とホルンの2組のカルテットによるもので、プログラムと演奏者は次の通りでした。

*モーツァルトの弦楽四重奏「狩り」

Ms. Liana Zaretsky, *violin*

Mr. Colin Davis, *violin*

Ms. Ann Black, *viola*

Mr. William Round, *cello*

*ロウレル・E・ショウ作曲「フレンチホルン・カルテットのための小品集」より8曲

Mr. Kevin Owen

Mr. Richard Menaul

Ms. Nona Gainsforth

Mr. Thomas Haunton

演奏者にも大いに楽しんでいただけたようで、来年も日本公演があれば、是非とも日本ボストン会のために再び演奏したいとのことでした。

山田敬蔵氏(50年前 ボストン・マラソン優勝者)

今年は夫妻でボストン・マラソンに挑戦

時間 4時間10分11秒で完走

昨年11月30日に満75歳を迎えられた山田敬蔵さんは、今年4月21日のボストン・マラソンに優勝50年目のアスリートとして招待され、ご夫妻で参加、共に完走を果たされました。現在の高齢化時代の健康維持の秘訣を、毎月、755キロの練習の中から試されておられます。来年で10年連続参加記録の達成を希望されておられます。

ボストン日本人会「会報」編集長穴井幸二先生が大会前日の4月20日にインタビュー、山田さんのボストン・マラソン優勝までのご体験および優勝年次「1953」のゼッケン番号をつけたレースのウェアの写真を「会報」号外で紹介されました。



いけばなの会のお知らせ

◎いけばなインターナショナル東京支部月例会

開催日: 10月21日(火)午後1時~嵯峨御流

11月21日(金)午後1時~池坊

会場: 東京アメリカン・クラブ

(最寄駅 日比谷線神谷町駅)

デモンストレーションでは、植物による立体造形が出来上がる過程をお楽しみいただけます。

*会員のゲストの参加も歓迎されております。

*申し込み先: 佐藤

◎池坊東京生成会支部創立35周年いけばな池坊展

開催日: 10月30日(木)~11月4日(火)

会場: 銀座・松坂屋

歌う会のお知らせ

歌の好きな方をお誘いしております。

毎月1回、発声練習を基本に、良く知られている歌を混声合唱で歌っております。

練習日は現在のところ、毎月1回、私の自宅に集まって練習を繰り返しております。

昨年12月25日(水)には午後2時からクリスマスうたを歌う会を開催しました。今年も同様の企画を準備しております。

ご興味の有る方は、下記までご連絡下さい。

酒巻:

幹事会記録

日時: 2003年6月12日(木)午後6時半~9時

場所: 新宿サミットクラブ

出席者: 16名

*新入会員: 森良和氏。

*クルーズの会の発足、明年早々、日本に寄港する船の体験見学の機会を企画中。

*お花見の会、3月30日(土)(19名参加)、(別項参照)。次回からの幹事は三好彰氏をお願いすることを承認、04年4月3日(土)予定。

*ゴルフの会、4月17日(木)伊藤英徳氏優勝。次回は10月9日(木)於泉カントリークラブ

*美術の会、5月31日~6月1日名古屋ボストン・明治村訪問の報告(21名参加)(別項参照)

*ハワイの会、6月8日鎌倉散策(13名参加)(同)

*ボストン・ボブス・ミニコンサート、7月中旬開催。(同)

*紅葉狩りの会、発足を承認。(来年から企画)。

*歴史を飲もう会、浜離宮~浅草、9月末予定。

*歌う会、月一回、酒巻氏自宅で開催。

*ボストンへようこそ販売状況、

48冊購入しほぼ頒布済。再注文を予定。

*健脚向きの山歩き会を企画中、幹事役に當間氏・山崎氏。

*ボストン日本人会会長が小久保武氏から安武和美氏に交代された旨の報告あり。

*次回会報発行予定、8月末原稿締切、10月10日に発送予定。

日時: 2003年10月3日(金)午後6時半~9時

場所: 新宿サミットクラブ

出席者: 21名

*ゲスト、Japan Society of Boston ピーター・グリーリー理事長が当日来日されたので、途中より出席された。今年末より2005年にかけて、創立百年記念行事が予定されており、年末に行事計画が決定される、この行事の間に、出来るだけ多数の方々が日本から参加して欲しいと要望あり。

現在、確定しているのは、年末・年初の行事に札幌から氷の彫刻師を呼び、江戸城の制作を依頼している他、来年4月19日のボストン・マラソンに過去50年間に参加した日本からのアスリートを招待する計画があることを紹介された。

*Japan Society of Boston を他の関係団体と同じ扱いとすることを承認。

*11月14日総会準備討議・打合せ。

*ボストン・ボブス・ミニコンサート(Jul.17)報告。(別項参照)

*ゴルフの会: 次回(Oct.9)参加者状況報告。

*花見の会: 04年4月18日(日)浜離宮庭園に変更。

第17回ゴルフ懇親会

春期コンペ優勝

伊藤英徳

5年程前から飛距離が目に見えて落ちてきました。試行錯誤の末、シャフトの少し長いウッド4本を大枚をはたいて入手。それがかえって災いしたらしく長期に亘る大スランプに突入したのです。

以来あらゆるコンペで入賞は全く無縁になりました。又この3年、所属倶楽部でのハンデが毎年1つずつ悪くなり、遂にBクラスへ転落寸前になってしまいました。いっそ魚釣りに転向しようかとも思い悩んでいたのです。

たまたま神様のいたずらか、昨年春のこのコンペで家内が優勝しちゃいました。それも新しいクラブを購入した直後でした。常々家内には“クラブを替えるより自分の腕を変えろ”と言い続けていたものの“ナンデダロー?”と悩むことなく“ゴルフはクラブだ”と即断いたしました。

半年ばかり捜し廻って漸く今のウッド4本とめぐり逢ったのです。そして今春、家内に1年遅れての優勝となりました。

“皆さん、ゴルフはクラブですぞ……”

なお、4月17日の泉カントリー・クラブにおけるコンペ参加者は12名、入賞者は次の通り。

1位:	ネット77(グロス86)	伊藤英徳
2位:	ネット79(グロス111)	藤盛富美子
3位:	ネット85(グロス105)	當間秀雄
BB:	ネット91(グロス127)	磯崎暁子
BG:	86	伊藤英徳

(10月3日幹事会議事録 つづき)

*ホーム・ページ: 過去1年間(02.Oct/03.Sep)のアクセス回数、約1万回、最近は月間約千百回。

*藤崎顧問より名古屋ボストン美術館支援のご提案があり、ご意見を今号会報に掲載することを決定。

*美術の会: マリ・ローランソンの回顧展鑑賞会(Sep.3)報告。

*歴史を飲もう会: 浜離宮庭園~浅草(Sep.21)報告。

*『ボストンへようこそ』改訂版本年11月発行予定。

*ハイキングの会と山歩きのを年内12月同日に企画することを決定。(案は丹沢・大山、ルートは別)

*クルーズの会: 新造客船クルーズ・セレニティ 試乗会(明年2月、グアム/横浜)お知らせの会報掲載を報告。

*次回会報: 1月末原稿締切、3月中旬発行予定。

*次回幹事会: 03年12月9日(火)。